

蠅螂鮞鐵道

泉鏡花作

—

持主もちぬしなりし人の名ななるべし。裏うらにならべて稍斜せうななめに、
H、H、H、と三字書さんじかいたり。幾度いくたびか繰返くりかへして愛讀あいどく
せる其眼そのめには觸ふれたりけむ。假綴かりとぢの繼絲つなぎいとぎれ斷々／＼になり
て、表紙へうしは纔わずかに其一部そのいちぶを殘のこして、辛からうじて着つきたる
のみ。

手荒てあらく取扱とりあつかひしものにはあらず、持主もちぬしの鄭重ていちようなる、
西洋紙せいやうしの薄うすき表紙へうしに、厚あつき西にしの内うち以もて兩面りやうめんに蔽おほひかけ
たるが、持古もちふるしたればならむ、煤すすけて薄黒うすくろくなりた
り。

エツキス
と題だいしたる此小説このせうせつの題字だいじをば、其蔽そのおほひの紙かみを
すかして、原もとの書體しよたいに違たがはざるやう、上うへより袋字ふくろじに
寫うつし取りとりて、おなじくエツキス書かきて、また其上そのうへに金きん
の箔彩はくさいりつ。下したに小ちひさく（完まつたく）とぞ記しるしたる。

著者、秀蘭、畠山、須賀子は、掌に乗せて
つく／＼と見たりしが、顔をあげて、山科の家の
内室と眼を合せぬ。

02

二

山科の、主婦は身體瘦せたり。瞳清しく、客に向
ひて、ものいひいづる聲沈みぬ。
「お須賀さん、御覽の通り、何のお愛想もなし、
お構ひ申すことも出来ませんが、貴女、其が何より
でせう。大層大事にして持つて居たと見えますね。
風説も聞いて居ますが、私も拜見して面白う思ひま
した。めつきり旨くなつたのね。」

お須賀は少しく顔を赧らめ、

「も、お恥かしいんですよ。あなたの前ぢやあ冷汗が出来ますもの。可いもわるいも何うせ學校に居ました時分は、あなたにお作文を直して戴いたんですものね。御覽で、恐入ります。其上、あの、何うも濟みません、つい何だものですから、貴女お怒り遊ばしはしまいかと思つて、もう小さくなつて參つたんです。」

「いゝえ、結構。私のことを忘れない、でまあ、よく書いて下さいました。しかしお須賀さん。」

此聲力籠りたれば、客なる女作家は俯向きたり。

「長屋も長屋、こんな邊鄙な處の、路地の奥で、御覽の通り八疊一室で、貴女には、見えも外聞もござんせぬが、火鉢一ツ無いでせう。ま、手桶も不自由といふので、お客様にお茶をあげますにも、この口の缺けた土瓶を持つて、私が井戸端へ行つて、大きな釣瓶から小さな口へあけるので、溢して、まあ、だらしのない。裾も何もびつしよりになつて、それをば着換へるものもあませんから、この體で、濕つ

ほい、かび臭い、疊たゝみに坐すわつて、氣味きみの悪い、踵かかとを浮うかしてさ、そしてあなたとお話はなしをする。ね、この口くちでいつちや、をかしうござんすが、ま、貴女あのだごぞん御存じだから言いふやうなものゝ、そりや私わたしは書ほも讀よみました、字じも習ならひました、人形にんぎやうの首くびならば繪ゑも書かきます、佛蘭西語ふらんすごも眞似まねならばしますが、其それが何なんの役やくに立たますもんですか。つまりいへば、貴女あなたは、些ちつとはものも知しつてる女をんなが、土方どかたや何なんぞの妻つまになつちやあ、氣きの毒どくだ、可哀かはい相さうだ、つまらないと、いふやうにお思おもひなすつて、可よござんすか。それで、この、
エツキス
もお書かきなすつたやいなものですね、其それはね、お机つくえに對むかつて、空くうな家政學かせいがくでも讀よんでる時ときの考かんがへですよ。

かうなつてはね、せめて長屋ながやなみのおかみさんづきあひでも出で來きる方はうが、いくら可いいか知しれませんが。毎朝まいあさ御飯ごはんを焚たくてツちやあ、良人やどの到手てつたひをして貰もらふやうでは、ほんとに仕方しかたがないんですもの。衣物きものだつて、たちおろしの絹きぬものばかり手てに懸かけてゝも、つぎはぎが出來で來きないぢやあ困こまるんですよ、お須賀すかさん。

甲斐性のないことゝいつたら、良人にもぼろをさげさしときや、我身でも釘裂をひつぱつて、何んなに見つとも無いか分りません。

書が讀めたつて、お客様の名刺一ツ讀まうでなし、字が書けたつて、あなた、二年にも、三年にも、お朋達の處へ年頭状一枚書いて出せないやうな身になつては、何にもなりやしないんですから、私や却つて良人のに恥かしくつて、氣の毒でなりません。力がありや荷車の後押でもしますがね。働がありや内職でもして、お菜だけなりと稼ぎ出したら、良人も何んなに都合が可いか知れませんが、何うでせう。不規則な食物を頂けば胃が悪くなる、元結でも抜らうと思へば、れうまちに障りますね、寒けりや、寒いで、風邪は引くんだし、氣候が悪ければ脳がいけないツて、いつたやうな、こんな、厄雜な、病身な、甲斐性なしの、なまけものを、土方の内に置いて何うなりませう。ほんだうに氣の毒でなりません。其に悪い顔一ツ見せないで、優しくして、可愛がつてくれますもの。土方だつて、何だつて、私にや過ぎものゝ良人ですよ。

あんな學問がくもんなんかしなかつたら、些少ちつとは氣樂きらくに暮くらせませうのに、なまじつかの其それが邪魔じやまになつて、時々ときどきは堪たまらなく、キ、キと胸むねへ何なんだか込こみ上げるの。なりたけもう忘れてしまひたいと思おもつてね、傍そばにや紙かみの片きれも置おかないやうにして居ゐるもんですから、此節このせつではね、それでもやう／＼もう餘程よつほど何か忘わすれてしまつて、お須賀すがさん、見みたつて、あなた一寸ちよいと見みたつて分わかるでせう。大分だいぶん鈍どんなものになりましたよ。」

女作家ぢよさくかは悄然せつぜんとして俯向うつむきたるまゝものいはず。

主婦あるじは音おんの調ていの變かはれるにもかゝはらず、さりげなう装よそほへり。

「ですから、あんなことも出來たものです。あなた、弟御をとうとこさま様が何かおつしやりはしませんか。いえね、何も他ほかではないんですが、此間このあひだ、古本屋ふるほんやの店みせでああなたの弟御おとうとこさま様に、このエツキスを戴いたいた時ときですよ。夜分やぶんぢや、ありましたけれども、つい、何なんなの、お須賀すがさん、焼芋やきいもを買かひに入はいつたんです。小兒こどもを負おぶつてさ、この書ほんを片手かたてに持もつてね、可いぢやあゝりませんか。おほゝ、何なにも私わたしは知しらないで居ゐました

けれど、お聞き申しますやうでは、弟御様が見て
在らつしやつたかも知れませんのね、ちつと恥かし
いやうです。まだ娑婆ツ氣が取れません。」
と淋しき笑顔したりき。淋しき笑顔なりき。原よ
り愛嬌には乏しき人の、眉はりゝしげなれど、口は
しまりたれど、色はいと白けれど、氣高くは見ゆれ
ども、太くやつれたる人の笑顔ぞ淋しかりける。

03

三

「實に濟みませんでした。も、何うしたら可うござ
いませう。私がもう些と分別がございますと、斯

うして、今日だつて然うなんです、參られたわけぢやあござんせんけれど、つい、あの弟がね、富坂上の古本屋だとかいひましたつけ、この書を見つけまして、斯う言ふ風に讀んであつたもんですから、何うでせう、私に一ツ喜ばせようと思つて買った時に、丁どまた、貴女が行らして、店へお立ち遊ばしたんですとね。あの兒も、些ともあなたを存じちやあ居ませんでございましたでせ、うけれど、
エツキス
といふ小説はツて、あなたがおつしやつたのを、聞きましたさうで、おや、と立留まりましたさうでした。

さうすると、斯う、あちこち御覽遊ばしながら、さつき行きがけに、一寸見て置いたんだが、此店に、
エツ
キス
といふ小説本があつたつけ。ちつと借りたいが、何うしたんだえ？ と、ま、失禮ながら打明けて申ませう。なりにはお似合ひ遊ばさない、しつかりしたお言だし、お人品もお人品なり、其に彼の兒も姉の書いた小説……といふんですか、まあ、其ことをお聞き遊ばしたもんですから、何うも黙つて居られなかつたさうで、差出て、買ったのをお貸

し申しましたさうですが、つい、お所ところもうかゞはな
いで、其それツ切きり。あの、何なんですよ。えゝ、其それも、其そのお
買物かひものを遊あそばしたのも、お見受みうけ申まをして居ゐましたさう
ですが、無暗むやみと喜よろこんで歸かへつて來きましてね、そして其そのは
話なしをしますから、ふと其何そのなんでしたの。お姿すがたなり、お
言ことばつきなり、何どうも、あなたでおあんなさるやうに
察とれましたので、もしやと思おもつて古本屋ふるほんやで、あと、
四五日しごんちも後あとでしたツけか、弟おとうとに聞きかせましたら、
あゝ、ちよい／＼本ほんをお借かり遊あそばす、あの方かたならば
ツて、いつてきかした、お名前なまへが、貴女あなたでせう。

直すぐ出懸でかけまして、お宅たくを伺うかがつたら、つい二三日にち
前まへこツちの新井あらいの方ほうへお引越ひっこし遊あそばしたつて、さう
いふもんですから、お目めには懸かりたし、お詫わびも申まをし
たし、始終しじうね、恚かう申まをしては何なんですけれど、あゝ、
學校がっこうでは山科やましなさんといふと上下うへしたひ響ひびいたものだけに、
あんなにおなんなすつてから、何どう遊あそばして在いらつ
しやるだらう、とね、なかの悪わるかつた、つまらない
方かたが、皆みんな、馬車ばしややら、人力じんりきやらで、やれ、花はな、それ、
月つきとおもしろく世中よのなかを送おくつて居ゐるのを見みます度にたびね、
私わたしは口惜くやしくツて堪たまりませんで、何なんの詰つまらない。束ねたは

髪の前垂がけで構ふものか。山科さんを引張り出して、日本橋の上へ立たしたら、小さくなつて河岸の軒下を通らうのにと、さう思はない日といつちやあなかつたもんですから、つい、あんないたづら書もしました譯だし、お目にかゝつたら、またお机に絶りついて、詩集のお談でも伺はうと、實はね、あなた思ひこんで居ましたが。」

言ひかけて、ぢつと見て、
「大層貴女かはりましたねえ。」

あるじは膝を正したり。須賀子も襟を掻合せつ。

「汽車を下りると、田圃道で、最う方角も何も分りませんので、道を聞いてお顔を見ると、其が貴女だつたのには吃驚しました。お小さいのをお抱きなすつて、草履穿で、地藏様の前にお立ち遊ばして在らつしやつた、あの、お姿にはほんたうに泣きました。私、ぼんやりしてしまひました。」

けれども唯今のお話を承ります、と、申しやうのない思召で、さういふ貴女のお心では、あなた

が、何ぞ不平なやうなお言でもありませんたら、却つてお宥め申しませんければなりませんやうになりましたね。

そりや、お両親はおいでぢやあなし、お小さい時分から、伯父さんにお育てられなさいます、其御親類のお計らひで、唯今の旦那様に、何もおつしやらずにおかたづき遊ばしたが、全く伯父さんだつて、こんなことに成らうとは思し召さないで、ま、其時分は立派にお暮しなすつた方へ、お世話なさいましたわけですから、其をお怨みなさいますと言ふわけにはゆかず、一旦おかたづきなすつた上は、旦那様のことですよ。譬へ何んな落目におなり遊ばさうと、兎や角、あなたがおつしやるわけのものではない、そりや何處までもお従ひ遊ばさなければなりません。つまりあなたのお身體を旦那様のものとして、そしてまあ、かうやつて、お暮し遊ばして在らつしやれば、なるほど、學問を遊ばしたのが、お邪魔になるでございませう。源氏をお聞き遊ばしたのも、英文をお綴り遊ばすことも、書のお見事なもの、佛蘭西のお出来なさいますのも、何んなにか、お邪魔

主婦は俯向きて、傍を見向きたり。色白くうつくしき男の兒の、太く痩せたるが疲れし状にて、あをむけに枕して臥したる、色褪せし茜木綿の枕かけに、鼠の齒形つきて、蕎麥の殻は溢れ出でつ。

寐ねたる兒は、氣高き臉を心ばかり動かしながら、幽に躰をぞ立てたりける。

ぢつと下眼に見ながら、

「學校へ参つたのが邪魔になるツたつて、書籍を讀んだのが妨害になりますたつて、此兒ほどぢやありません。こんな面倒ツ臭いものはないんです。」
と聲をふるはして、主婦はまたも息をつきぬ。

須賀子の暖かなる右の腕は、ソと枕の下より、寐ねたる兒の項をからめり。

「御道理です、貴女、そりや御道理ぢやありません。すけれども、御自分で、御勝手に御自分のなすつた學問を邪魔に遊ばすやうに、このお兒様を邪魔になすつちやあ不可ません。この、まあ、お色の白い、

華奢な、御發明さうな、可愛い、お顔つたらない。

御覽なさいましな。野原で董でも摘んで、あちこち
■しておいででの處の、夢でも見て在らつしやるんだ
よ、屹と。あれ、睡つておいでの眼の中が、動きま
すぢやあございませんか。」

と頼ずりしていふ。主婦は口許を弛めもせで、

「食物でも捜してる夢なんでせう。それがまた動
かないやうになれば、お須賀さん、もう活きちやあ
居ないんですもの。何も眼を動かして居たからたつ
て、變つたことはありません。」

「まあ、そんな理窟ぽいことはおよしなさいまし。
可愛いに、理窟も何もありませんわね、貴女、
もうお幾歳におんなさいますの、お三歳？」

「いゝえ、五歳です。養が不十分な故でせう、
毎月些とづゝ小さくなります。」

といひかけて眼をしはたゝけり。須賀子はわざと
心には留めざる状しつ。

「それが矢張可愛くつて在らつしやるんですよ。
可いぢやありませんか。掌中の珠つていひます

もの。でく／＼したのは削りかいて、石垣にでもするが可ござんす、ねえ。」と兒の耳に口をつけしが、恠くして呼ぶべき、其幼兒の名を知らざりき。

「何と然うおっしゃるの。お名は、あの何とおっしゃるの。」

主婦は投出したる口氣にて、

「そんな兒に名なんぞが要りますものか、詰りません！」

「何をおっしゃるんですよ。」

「いゝえ、それでもね、生れた時には良人と二人で、木の性だから、あゝだの、水の性だからかうだのつて、源平藤橘なんか引張合つてつけたんですがね、今ぢや氣恥かしくつていけません。」

「飛んだことばかりおっしゃいますのね、ま、あなたは何んな御出世を遊ばさうも知れませんが、あゝ萬々一にも此のまゝでお暮し遊ばすにした處で、お身體に備はつたお位を、そつくりこのお兒様にお譲り遊ばしたのと思つて在らつしやれば可いぢやあゝ

りませんかね。きつと御出世を遊ばすわ。このお顔つきを御覧なさいな。……卿とでも、何ともお名のりなすつたつて可いぢやあゝりませんか。ね、眞個に何とおつしやるんですよ。」

わづかに笑ひて、

「しんこつていふんです。しんこー新粉ツ

て言ふんです。」

「新粉ツて妙ですね。」

「その位なもんでせう。」

須賀子は膝を寄せたり。二人は顔を見合せぬ。

「そんなお名ツてのがあるもんですか。」

「いゝえ。」

五

「それでもはじめの内は世間普通で、人様にお交際の出来るやうな名をつけて置いたんです。」

主婦は手近なる硯箱引寄せつ。蓋は盆にかへて、小さき皿に煎餅装りたるを乗せて先刻須賀子に與へたり。硯の中少しばかり濡れたりしに筆をつけて、掌に、信行の二字をば見事に書いて見する。

「お須賀さん、これを訓にしてつけておいたの。」
「おや、信さん、信行様ですか。可い名なこと。」

「それ御覽なさい。ですから今ぢや、氣恥かしくツて、人様の前ぢや信行ツていへませんから、無暗に信行、新粉ツて恚ういふんです、困りますよ、お巡査さんが戸籍を検においでの時、一々名を讀み立てられるには。ほんとに、新粉にしてしまへばいゝ。いづれ、両親の玩弄物になつて、後で日が経てば、干かちびて、うつちやられる位なもんです、お須賀さん。」

と凜として、聲に力を籠めてぞいひたる。

06

六

須賀子はめまじろぎもせで聞きたりしが、急に身を投げて、幼児の腹に、ふつくりと襲着せる、衣柔かなる胸をあてゝ、両手に犇と抱きつゝ、膝にのせてかゝへ起せば、うつとりと眼をあきながら、なほ人顔をわきまへで、其まゝおしあてたる兒の頭に、須賀子は頬をつけながら、怨むが如く、

「不可ませんよ。不可ませんよ。もう、そんなことおつしやる方に、此兒を預けちや置かれません。何うして、この坊ちゃんを、あなたに持たして置か

れますものか。危い！」

「え。」

「危険ですわ、ほんたうに……」
と呟きつゝ、面を正して屹となりぬ。

「あなた。」

「はい。」

「このお兒を、私に下さいませんか。」

「あの、信行を。」

「え、私に下さいまし。何卒私に下さいましな。

兒を持つたことはございませんが、育て方は教はりました。貴女、學校の先生は、宛然違つたことばかりは教へますまい、屹とお育て申す。立派に大人にして見せますから、思ひ切つて預けて下さい。」

主婦はまた須賀子の顔を瞻りたり。

「しかし、其は私一人の兒ぢやありませんもの。」

「旦那様には何とでも可いやうにおつしやいましな。遣したとでも、忘れたとでも。あらたまつて申

したら、そりや、何てツたつて、お一人子を、他人
手にかけてようとはおつしやいますまいから、其處は
あなたが計らつて、何とでもいゝやうにして、何う
ぞ私に預けて下さい。ね、あなた、可いでせ
う。」

主婦は言はざりき。

「可いでせうね、いけないたつて、何うしてもお
連れ申しますよ！」

「學校の氣でいらつしやる。」
と珍しくもいとにぎやかに笑ひたる、渠は眞とは
せざりしなり。

須賀子は色を正して、

「串戯ではありません、あなた。」

一際聲を沈めつゝ、

「あなたに持たして置きますとね、坊ちゃんの身
が案じられます。しまひにや殺さずには置きますま

い！」

主婦は蒼くなりぬ。

戸外の門慌しく引きあけて、裾をば端折りたる瘦
脛長く、ひよこ／＼と身を浮かして、ものゝ忍びや
かに、然れど息忙しく、走り入りたるは家の主人な
り。其瞳定まらで、うろ／＼とニす眼に、女性の
客も見えざりけむ、身を繕はむともせで妻の傍
に踞ひつ。助けを求むる如き弱き聲にて、

「お品、あゝ吃驚した／＼。」

「何う遊ばしたの。」

極めて何気なき状したれど、眼の色はたゞならず。
今女作家に看破されし胸の内の、見え透くとや惟ふ
らむ。

良人は唯どぎまぎする。

「あゝ、あゝ、お品、憲兵さんが来た。」

「何をおつしやいます。」

「何てツて、お前、来たよ、憲兵さんが来たよ。」

憲兵さんが来たんだよ。」

「憲兵さんが何ういたしました。」

「うむにやさ、憲兵さんがの、今日な、ぼてふり

の角がお前。河岸のこぼれだつて、見事な奴を一尾
持つて居たらう。見ると、旨さうで八ヤ蟲唾が走つ
て堪らんぢや。處で、五百出して大い奴の、これだ
けあらうといふのを買い込んで、一番うむと御馳走
にならうと思つて、まだ仕事中ぢやつたが、一度中
歸をして、宅へ置いて出直さうと思つて、踏切の此
方まで來ると、あゝ、吃驚せまいことか。むかうか
ら年の若い、顔の緊つた、一見識あらうといふ、立
派な憲兵さんが、お馬で、ずい、とやつてござる。
あわをくツて半被の下へかくしたけれど、例のが、
のはうずに大いと來て居るので、ぬうと尾のさきが
見えくさる。はツと思つた、と、むかうでも眼を着
けた、南無三ぢや。御法度は承知なり、お前もさう
いつたつけが、憲兵さんはきびしいで、巡查のやう
なものではなうて、恐しく取ツちめると知つてたで、
堪らぬわ。其まゝ地面へうつちやつて遁げて來たが、
何うもな、あとをつけて來たやうで落着かれぬ。一
廉、とがめられずには濟むまいかの、の、お品。」

とて屈託顔する、笑止なり。恚るものを、冷かに
笑ひ棄てむとも妻はせで、

「何です、あなた、何をおうつちやりなすつたの。」

「え、御法度の例物よ。それ、くはぬたはけに食ふたはけといふ。」

「お魚？」

「やれ分りのわるい、鰻ぢや。」

「まあ、何うも。」

と、微笑みたり。須賀子は、人の兒を抱きたるまゝ、身を開きて、片寄りつ。此方より差出で、われを名告らむともなさざりき。

「坊にも食はさうものを、可惜ことをした。まあ、身體中がなまぐさい。」

と袖を開きて香を嗅ぎしが、眉根を寄せてぞ仰向きたる。やがて其細き眼に、フト女作家を認めたり。認めあへず、けたましく、

「や、お姫様。何處の？」

とばかり、おど／＼して額づきぬ。

七

主人は見も知らざる眩き婦人の、目前に居たるに
 心また打騒ぎて、いよ／＼落着かざる状の、なほき
 よと／＼と、後見らるゝ顔色にて、手を揉み腰を浮
 かしながら、戸の方を顧みたるが、再び顛倒して色
 を失しぬ。

「や、や、だから其れいはぬことか。アレ見えた、
 さあ大變ぢや。お品拜む、助けると思つて、うまく
 言譯をしておくれ。俺も此處には居られぬ。あな
 たも何卒、何卒お言葉お添へなされて、穩便に、穩
 便に、出るぞ、頼む。」

といひあへず、室の中を立つてまはりて、打つか
 るやう裏口より田圃へ抜けて駈け出せり。二人は顔
 を見合せつ。齊しく戸外に眼を注げば、手綱を控へ
 て入居たり。軒よりも高きあたり、近衛士官の制服

なる緋の洋袴の片足の豊に鞍にぞ跨りたる、女作家
は見て微笑みぬ。

「あれ、旦那様はまあ彼の兒を、憲兵とお間違へ
なすつたんですよ、お品さん、弟です、」

「それぢや、あの、」
「はい、エッキスをさしあげました弟ですわ。」

女作家はいひかけて、信行を抱きたるまゝ、裳を
捌き、するりと立ちて、端近に立出で、

「千代さんー千代さん。」

「えゝ。」と答へ、馬上よりすかし見て、

「おや、姉様、此處に。」

といふより、佩劍の柄持添へて、ひらりと馬より
おり立ちぬ。

「今ね、おもしろい男がさ、僕を見て、あの踏切
へ鯁をうちやつて駆出したから、妙なことをすると
思つて、あとをつけて来たんですが、姉様、何誰
の。」

「はあ、お品さんのお宅なの。一寸御挨拶申すが

可い、貴女、千代太郎です。」

少年士官は轡を取つて、歩武を進め、框の外に一揖して、

「其後は。」

「久時でございました。」

恚りし時、この品子の、其眉秀で、其鼻隆く、其口しまり、其眼涼しく、全幅の風采をあげて、一個また單に貧家の妻にてはあらざりき。

須賀子は何をか捌かむ状にて、

「千代さん、お前散歩かい。」

「は、雑司ヶ谷の方から新井へまはつて來ました、日曜で、お天気ですから。」

「まあ、よくね、いゝ處で出逢つたよ。些少おあがりでないか。お邪魔をさしてお頂きな。」

「何うぞ。さあ、」

「いえ、大きな荷物がありますから。いづれ、」

少年士官は打笑しが、轡の音して、鱗爪の響いと

高く聞えたり。

座を立ちし時、目覺まし居たる稚きものゝ、優し
き腕に手を縫りて、人見知もせて莞爾やかなりしが、
大なる動物の氣勢するに、ふと其頭をあげたるが、
士官の乗馬を眼ばやく見て、

「お馬、お馬。」

背返りして、須賀子の腕に伸びあがり、愉快らし
く指さしいふ。

「おほ、お馬、お馬。坊ちゃん、お好き、アノお
好なんですか。」

「まるで夢中です。」

「勇ましいことね。千代さん、ちつとお抱き申し
て乗せておあげだといゝ。」

「結構、さあ入らつしやい。」

「泣かせちゃあ、嫌よ。」

と片足土間に下りざまに、須賀子は弟の手に、
信行を渡すとて、ソと目配しつ。

「遠くへ行かないでさ。」

品子は端然として見たるのみ。

「恐入ります。」

「どれ。」

と抱き取り、其まゝひらりと土官は騎しつ。立ちもやらざる品子の顔をぢつと見て面を背け、笑顔の頬をば稚兒の、頤にあてゝ俯向きつゝ、肅としてイみしが、鞭あてむとせず、おのづから馬にまかせて打つたりける。

「お須賀さん。」

いま座に歸れる須賀子の手を、主婦は突然固く握り、年上のおのが膝に引寄するが如くにし、色をかへて身を震はせしが、何思ひけむ笑出しぬ。

「ほゝゝ、あなたは鰻をあがりますか。」

と握りたる手に力を籠むる、突如としたる舉動に、さすがの作家も氣を奪はれ、呆れて、眼をニりて、眞顔に主婦を瞻るのみ。

「あがるんですか、あの、鰻といふものを、え？」

「いゝえ。」と内端に答へたり。

品子は頷き、

「あがりません、然うでせう。けれども、そりや貴女お一人だからさ、いまに御婚禮をなさいますと、さうすると、屹と鰻をおあがりですよ。」

「何うですか。」

女作家は茫然たり。あるじは膝の上に、おさへたる年下の女の手を、また強く推着けながら、

「何うですかツてもね、お須賀さん、こゝに毒があります、可ござんすか。恐しい、恐しい、毒なものがあると、言つたやうな譯ですよ。見るも嫌、食べたら生命にでも障りはせぬかと慄毛が立つと、して置くんですよ、解りましたか。」

すると、自分の旦那が其を食べて、何うせ中毒つて死ぬものなら一所ぢやあないか。毒にあたる分には誰だつておんなじことだのに、夫婦のなかで、一人が食べるものを、一人が食べないといふことはない。

トさあ、こんなことに成つたら何うします、お須賀さん、お須賀さん。」

須賀子はわつと泣き出しぬ。しつかと其肩搔抱き

て、

「もう一度、あなたと打毬がして遊びたい

ね。」

と言ひかけてはら／＼と落涙せり。

08

八

「あれ彼處に。」

「

と見やりたる、一叢薄の薄き雲、白き穂の茂れる
なかに、黒き駒見え、緋のズボン、輝く劔も見えす
きたり。

駒のたてがみ風に纏れて、颯と靡いたる薄の上に、
近衛士官の帽あらはれ、波のまに／＼打つ如く、廣
野の末を一直線に行きつ戻りつしたりしが、立停り
て、やゝある間に、須賀子は走り近づきつ。

と見れば、榛の樹の低き枝に、蟪蛄の一寸居つ。
少年士官は一本の薄を抜き取り、蟲が傾くる斧をつゝ
きて、龍車に向ふ其怒りの、もの／＼しく可笑きを、
抱きたる稚兒に指し示して、賺し、且つ慰めたるな
り。

姉は見るより莞爾として、

「よくおもりが出来るのね。」

「一度泣きかゝつて困つたよ。そしてもう歸るん
かね。」

「はあ、あの品子さんは踏切の信號をね、内職に
して居るんだツて、ちやうど時間だから停車場へ行
きながら送つて下さるツて、私はこれに乗つて牛込
見附まで行くつもりだから。そしてとう／＼このお
兒を貰つたよ、ほんたうに私や泣いたよ、可哀相ツ

ちやあない。鰻まで食べさせられりや澤山だわ。」

「何うしたんです。」

「まあ、歸つてゆつくり話さうね。さあ、坊ちやんを此方へおよこし、高い處で、また蟲でも起しちや不可ません。」

「で、貰つて、直ぐ連れて歸られますか。」

「あゝ、然うとも。」

「そりや可ござんした。」

姉の抱き取りたる信行をば、馬上より打視め、
「眼を御覽なさい、姉様、母様の兒です。僕も可愛がりませう。」

「あゝ、然うしておくれ、嬉しいこと。」

顧みれば、品子の、縞柄も分らぬまで着古したる素裕の裾は切れて、海松の如く、もつれて、垂れて、砂にまみるゝに、彼の稜骨を包みつゝ、穿き切らしたる冷飯草履に、身をまかし棄てゝぞ歩し來る。帯も細紵のまゝなれば、正しき衣紋も亂れて見ゆ、肩のあたりもいた／＼し、あはれ、其まゝ野に臥しな

ば、小町の髑體となんぬべく、目ざましきまで衰へたり。

心軽く須賀子は立寄り、

「ぢやあ、母様、わざと、最う参りますよ、可
ごさんすか。」

頷くを見るや、否や、稚兒を引しめて、はたと
走り過ぎ、線路の橋を渡り越して、停車場に駈け入
りしが、直ちに待合所に出來れり。溝を隔て、眼の
前に、品子は信號旗の捲いたるを力なく携へつゝ、
立木の幹に背を倚たして、あらぬ方をば打視遣りぬ。

汽車來れり。

凄じき響とゝもに、信行の、須賀子が膝より蹴ね
下りぬ。不意の物音に驚きけむ。

「母ちゃん／＼。」

と呼はりあへず、帯の結目ひら／＼と、可愛き足
の踵を見せてむかひ側なる母をあてに、アレヨとい
ふまに走り出で、線路の石壇に早や下りたり。蒼

くなりて須賀子は飛び着き、危ふく抱いて取る時疾し、流るゝ如く走りし汽車の一ゆりゆつて留りぬ。

同時に須賀子は吻と呼吸して、人の見る目の晴がましきも思はず、高く頭の上に稚兒をツと差上げた時、品子の手なる信號旗の青きがひらりと翻りつ。地響して汽車留まりしトタン、無量の思を籠めたる眼に、彼方に背く品子の顔を、つく／＼と打まもる。時に、信行の危かりしに手に汗握れる少年士官は、ハツとわれに返りし状にて、衣兜なる時計を探り、カチと蓋あけて俯向き見たるが、手にせる薄を其まゝに、一あてあてゝ穂の波を浮いつ沈みつ行過ぎたり。

汽車また動きぬ。須賀子と稚兒を乗せ去りたるなり。

秋の日はやゝうすづきて、遠近の森は暗うなりぬ。淋しき野末に青き旗の絞りたるを提げつゝ、寂としてイみたる品子が冷かなる眼の注げるは、十町一列に穂の揃へる薄の穂と相並びて、東西に走りて

雲くもに入る、
二筋ふたすぢ長ながき線せん路ろの上うへに、
鰻うなぎの引ひ裂つかれし其それ
なりき。

【完】